

# ACeWOMAN

建設業で働く女性たちが元気だ。全就業者数からすると少数派ではあるが、現場で、技術畑で、管理部門で自らのスキルを最大限に活かそうと、日々挑む姿が清々しい。業界も就労環境の整備を通し全力でこれに応える。わが国の労働人口が減少する状況にあつて、女性の労働力は計り知れないポテンシャルを秘めている。この可能性を現実に結びつける方策はどこにあるのか。業界の取組み、女性労働者たちの想い、その両面から探ってみた。



特別  
特集

## いま、建設業で活躍する女性たち

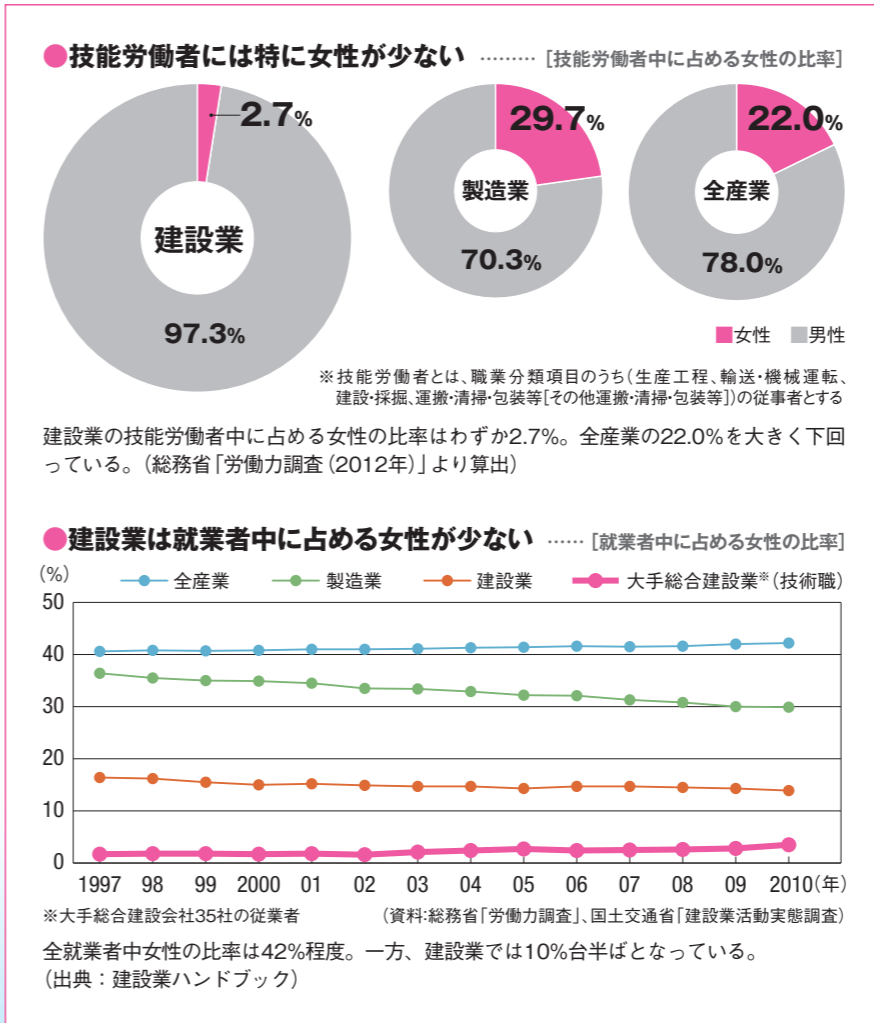
# 女性の社会進出と建設業界の課題

**建設業界に女性の力を。変革に挑む業界と現場。**

わが国の女性就業者は一九七〇年代以降増加傾向にあり、現在、女性雇用者数は二、二〇〇万人を超えている。全雇用者の半数近くを女性が占めていることになる。女性比率を業種別で見ると七割超の「医療・福祉」を筆頭に「宿泊・飲食」「教育」「卸売・小売」などの業種で働く女性の数が男性を上回っている。

しかし、全体の労働力人口は減少傾向にあり、政府は女性の潜在力を引き出し、その活躍を促す取り組みを具体化させている。

建設業界でも労働力の弱体化に拍車がかかっている。ピークとな



## 女性の社会進出と建設業界の課題

女性はその感性や生活者目線、コミュニケーション能力を活かし、力を発揮できる多くのチャンスが、建設業にはあります。

もっと女性が活躍できる建設業を目指して、5年以内に女性倍増の目標を掲げた「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定し、官民挙げた取り組みをスタートしました。

国土交通省としても、女性の登用を促すモデル工事の実施や、トイレ・更衣室など女性が働きやすい現場環境の改善を着実に推進して参ります。

日建連会員企業の皆様にも、女性の積極的な採用・登用や女性が働きやすい環境整備に一丸となって取り組んでいただくことを期待します(8月31日)。



国土交通大臣  
**太田 昭宏**

つた一九七九年の六八五万人を境に減少に転じ、二〇一一年には四九七万人にまで落ち込んだ。さらに、若年層が減少。高齢化が顕著になっている。多くの技術者、熟練技能者の退職が進行する中、培われてきた技術の継承も大きな課題として浮上している。

建設業界の技術力や労働力をいかにして維持するのか。その打開策の要と目されているのが「女性労働力の強化と拡充」だ。しかし、型枠工、鉄筋工、とび工など女性

の技能労働者の数は九万人、全体(三三七万人)の二・七%に過ぎない。製造業の二九・七%、全産業二二%と比較しても極端に少ない現状にある。

女性技能労働者が実感するのは重量物の運搬など、男性と比較した体力の格差だろう。しかし、業界には女性が活躍できる場が多数ある。むしろ、女性だからこそ高品質化が期待できる職種も少なくない。住宅のリフォームでは、女性目線で住環境を観る配慮や、織

細で丁寧な施工はこうした弱点を補ってあまりある。

建設業界は、「建設現場は男の世界」といった旧態依然の意識に囚われてはいないか。女性が内包する能力を過小評価する傾向はないか。建設労働力の充実には業界を挙げた根本的な意識改革が必要なのかもしれない。そして、いま現場は変わり始めている。さまざまな局面で展開される取り組みを俯瞰し、実際の現場に挑む女性たちの声に耳を傾けてみた。

# これからの建設業は女性も主役に

積極的な女性活用を

建設業界での女性の活躍の場を増やすことを目的として、二〇一四年三月二十日、日建連は、「女性技能労働者活用のためのアクションプラン」を決定した。

アクションプランでは、建設業にはさまざまな職種があり、その多くは、女性が活躍できる余地が十分にあることを広くアピールするほか、現場において女性が安心して働くことのできる環境や制度の整備を進める、女性を主体とする「なでしこ工事チーム」を設けるなどの方策を盛り込んだ。

また、国交省や関係五団体とともに、「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定し、八月二十二日に発表した。

さらに同日、日建連は「日建連の決意」を表明。その中で、技術系女性社員の比率を五年間で倍増、十年間で一〇％程度に引き上げる

ことを目指し、意欲ある女性を積極的に採用することや、女性管理職を五年間で倍増、十年で三倍程度に引き上げることを目指し将来的には管理職に占める女性の比率を三割にすることを念頭に意識改革を促すこと。また、女性が働きやすい環境の整備を促進する制度設計の実施や、「なでしこ工事チーム」を日建連で登録・紹介するなど、四つの方針を表明した。

活力ある経済社会を維持するには女性の持つポテンシャルを引き出すことが欠かせないとこの観点から、これまで男性中心であった建設生産方式を女性が持てる力を存分に発揮できる建設業界に再構築することを決意し、今すぐに始められることから、取組みを進めていく。

## もっと女性が活躍できる建設業行動計画 (10のポイント)

### 女性技術者・技能者の5年以内の倍増を目指す

1. 建設業界を挙げて女性の更なる活躍を歓迎
2. 業界団体や企業による数値目標の設定や、自主的な行動指針等の策定
3. 教育現場（小・中・高・大学等）と連携した建設業の魅力ややりがいの発信
4. トイレや更衣室の設置など、女性も働きやすい現場をハード面で整備
5. 長時間労働の縮減や計画的な休暇取得など、女性も働きやすい現場をソフト面で整備
6. 仕事と家庭の両立のための制度を積極的に導入・活用
7. 女性を登用するモデル工事の実施や、女性を主体とするチームによる施工の好事例の創出や情報発信
8. 女性も活用しやすい教育訓練の充実や、活躍する女性の表彰
9. 総合的なポータルサイトにより情報を一元的に発信
10. 女性の活躍を支える地域ネットワークの活動を支援

### なでしこ工事チーム第1号誕生

日建連は8月上旬より現場で活躍する女性で構成される「なでしこ工事チーム」の登録募集を開始した。そして8月18日、第1号として「チームなでしこ外環田尻」に登録証を授与した。同チームは大成建設・戸田建設・大豊建設JVによる東京外環自動車道田尻工事の有志で6月に発足。メンバーはJV職員8人、専門業者の職員3人の合計11人。定期的に交流会等を開催し、情報交換を行っている。日建連は引き続きチームの登録を呼びかけ、女性の活躍をアピールしていく。



なでしこ工事チーム活動中!

### 専門部会女性委員による検討会

アクションプランの検討にあたって日建連では、「女性技能労働者活用専門部会」を設け、部会の女性委員だけで構成するワーキンググループで検討を行ってきた。女性の視点から見た建設業界の課題を洗い出し、女性の活躍の可能性について議論したほか、女性技能労働者の就業状況の調査等を行った。

議論には、国土交通省などからも、女性職員がオブザーバーとして参加した。女性の立場や普段の経験から得られた多くの意見は、アクションプランに反映された。



CONSTRUCTION  
MEISTER

# 女性技能労働者

さまざまなシーンで技術力を発揮する

女性ならではの感性が  
仕事に活かされる

型枠大工

置床工

サッシ工

造園工

クロス工

塗装工

建設業界は前述した行動計画を基幹として、女性労働者の活用に向け大きく動き出した。体制、制度の整備も進みつつある。こうした背景を踏まえ、実際の現場はどうか。建築現場で技術を武器に活躍する三人の女性技能労働者に話を聞いた。共通していたのは、それぞれが持つ技術に対するプライドと、自らの職務を全うしようとする男女を超えた強い志だった。

「女性ならではの」の繊細な感性が、現場のあり方を変えるシーンがあった。一方、「女性だから」というエクスキューズが通用しないのが現場の厳しさである。建設業界に身を置くようになった契機はそれぞれだが、そのハードルは決して高くなかったという。むしろ技能者として納得できるように技術を磨き、自分のスタイルを確立する、その過程に日々の達成感を見出し出していた。道程は楽ではないが「この仕事が好きだから続けていける」と異口同音に語ってくれた。

警備員

左官工  
大工  
大工

多彩な職種を網羅する、飽きのこない仕事。



## 注工 藤井 恵実



自分の仕事が残っていき達成感

東京都練馬区、西武池袋線大泉学園駅北口で昨年一月、大規模な再開発事業が始まった。施工を担う清水建設(株)の現場に「注工」の女性プロフェッショナルがいる。

建造物の防水から耐震補強に関わる一切を請け負う(株)ケルビンのパートナー会社、(有)本牧興業の藤井恵実だ。社長であるご主人とともに複合ビルの建設現場に入っている。ここでは、柱などのコンクリートの空隙目地にグラウト材(無収縮モルタル)を充填し、耐震性能を確かなものとする施工を担当。

当。技術と経験が求められる重要な作業だ。「防水に限らず今では幅広い施工を任されるようになりました。だからやっていて飽きることはありません。雑多な道具を積んだうちの車を見て『ケルビンさんは何屋さんなの?』と聞かれるほど仕事は多岐に渡ります」。

二一歳で結婚、半年後には娘も生まれた。この業界に飛び込んだのは一四年前、二〇代後半の頃だ。「大病を患い、勤めていた飲食業を続けることが難しくなりました。それならば忙しい主人の支えにな

りたい。はじめは怒鳴られてばかりでしたけれど」と快活に笑う。今では現場によっては職長を拝命するほどのベテランだ。「現場で働く女性はまだまだ少ないため、良くも悪くも目立ってしまいます。だからこそ、仕事を進める上では何よりも安全に気を使っています」。

娘の参観日に間に合わず、作業服のまま出席したことがあった。「娘には絶対に怒られると思ったんですが『ママかっこ良かったよ』って。その一言でこの仕事を一生懸命やってきて良かったと



社長(=ご主人)とのコンビネーションも完璧。現場では身綺麗に!が信条だ。汚れるのは当然という気持ちが油断につながる。「だから女性はダメなんだ、とは絶対に言われたくないんです」。



自慢の道具類。ピンクにこだわって使いやすいものを選び、自らカスタマイズした。



「カケダシのころはハンマーをトンカチと言って笑われました」。あらゆることを親方や先輩に教わった。現場の仲間も「先生」だった。

ACeWOMAN



「男性が3〜4カ月で終える見習いを私は1年かかりました」と笑う。いまや、この現場では104戸の置床を一人で担っている。

現場では複数の女性が働く。「四角い部屋を丸く掃くような仕事はしません。小泉さんは心強いスタッフ」と、周囲からの信頼も厚い。



しかし、現場は甘くなかった。出勤初日に後悔したと明かす。「材料のボードを持ち上げることすらできなかつたんです。はじめの一年間はゴミの片付けをしなごらの見習い。分からないことがあると、先輩を質問攻めにして、体力づくりと勉強の日々でしたね」。二年目からは施工を任せられるようになったものの、不要な箇所にはアジャスターを取り付けてしまい、怒鳴られたこともあつ

た。「現場の修行に男女差はありません。女性でも失敗すれば『日曜大工じゃないんだ！』と普通に叱られます」と笑う。信念は施工を終えた現場に「呼び戻されない」ことだと話す。「気を抜けば床面の水平が維持できず、現場に戻ってやり直しということになりかねません。一度つくったものに再び手を入れなければならぬような、汚い仕事はしたくないんです」。

置床工は女性目線が活きる仕事でもあると語る。主婦の日常的な動線を考えて、例えばキッチンでの人の立ち位置や、家具の配置場所となるポイントにアジャスターを増設して補強することもある。「この部屋で暮らす方のことを想像すると、材料の扱いや施工も自ずと慎重になります」と話す。アジャスターやボードの配置はパズルのように自ら工夫する。「このパズルを自分で解いていく

んです。仕事中は夢中になれるよ。それが置床工の醍醐味かもしれない」。建設の世界に身を投じて八年、今では職長を拜命するまでになった。先輩である弟からは「床馬鹿」という最上の褒め言葉を献上された。今日も現場に呼び戻されないよう黙々と、そして丁寧に床を置いていく。

こいずみ・まいこ◎株式会社ミヤガワに所属。置床工として数々の建築工事に携わる。

手戻りのない、丁寧な仕事を指す。



# 置床工 小泉麻衣子

住まう人のことを想い、工夫しながら施工する

現在、多くの集合住宅では各住戸の遮音性を高めるために二重床構造が採用されている。コンクリートスラブに直接カーペットやフローリングを施すのではなく、アジャスターという金具の上にボードを乗せ、その上に床材を施工する方法だ。配水管などの設備もスラブとボードの間に納めることができる。(株)ミヤガワの小泉麻衣子はこの「置床工」のプロフェッショナルだ。彼女が働く江東区東砂の五洋建設(株)が施工する新築マンションの建設現場を訪ねた。

看護助手として病院に勤務していた小泉がこの技能職を目指したのは三〇歳の時。すでに置床工として活躍していた弟の様子を見ていたからだという。「決して楽な仕事ではないはずなのに毎朝活き活きとした表情で現場に出ていくんです。ごく自然に、私もやってみたいなと思いました」。

CONSTRUCTION MEISTER





前田建設工業(株)の山崎正博所長(右)は「職員同様に直接連絡を取り現場の状況報告をお願いすることも少なくない。頼りになる存在です」と話す。

おける車両や人の誘導へと職務が移行していく。ただ、座学で学べるのは法的な規則や基本動作。「実務」は現場で自分なりのスタイルを見つけてながら習得していく。「私自身車を運転するので、ドライバー目線で分かりやすい誘導を考えた時、声のかけ方を試してみたり。私はどちらかというと身内にはビシッと警告するタイプですね」と話す。

現在の仕事場はさいたま市内の住宅街、前田建設工業(株)が施工する福祉施設の建設現場だ。着工から半年以上を経て、作業員やドライバーとも意思疎通がスムーズになり、安全の確度も高まっている。中村がこの現場で最初に行ったことは周辺の状況確認だ。段差の箇所、ゲートの状況、周辺の環境や交通事情などを把握した。危険因子を頭に叩き込み誘導に活かす。現場のルールを知ることも重要だ。こうした習慣はどの現場でも共通だと話す。「現場内で車両の入場制限があり、これを超える恐れがあるときはドライバーに連絡を入れ、場外で待機してもらうことも

現場や周辺への配慮が第一だが「現場のスタッフとともに建造物が出来上がっていく過程を見られることが嬉しい」と話す。



あります」。車両の出入をコントロールすることも警備員の重要な業務だ。

そして何よりも警備員に課せられる使命は、危険の予想される場所での事故の防止だ。自ずと近隣の住民、歩行者への気配りが重要なファクターになる。コミュニケーションは何よりも大切だ。「顔なじみになった周辺にお住まいの皆さんとの世間話も日常的なこと。子どもたちとも毎日明るく挨拶を交わします」。

周囲から見れば警備員は「現場

の顔」だ。警備員の仕事ぶり、態度で現場の印象はがらりと変わる。男性が厳しく監視する現場もあるが、住宅街などでは物腰の柔らかい女性警備員のニーズが高まっていると話す。「警備員イコール男性、という時代ではありません。やる気のある女性警備員がどんどん増えていきますよ」。中村はさらなる女性進出への期待も込めて最後にこう話してくれた。

なかむら・かずこ(埼玉出身、シテイトラスト株式会社入社後、さまざまな現場の警備員に従事。交通誘導警備業務2級取得)

CONSTRUCTION MEISTER



警備員

# 中村和子

仕事ぶりが現場の印象を左右する

きっかけは一〇年余り前、商店街で何気なく手にした求人情報誌だった。ベテラン警備員の中村和子は、この仕事を選んだ理由をこう語る。「最初は他の仕事と比べて、男女差がないということが魅力でした。実際に始めてみると、その現場の安全を担う業務の大切さも分かってきて、やりがいのある仕事だと思うようになったんです」。

警備員になるには四日間計三二時間の研修を受講する必要があります。その後、商業施設などでの監視、巡回業務から、工事現場に



「現場の顔」の自覚を持って、安全施工を担う。



### 3 子育て支援

提供：厚生労働省

職場のサポートを充実し、女性が仕事と子育てを両立できる環境整備が求められている。例えば、子育て支援に積極的に取り組む企業を示すマーク「くるみん」。(厚生労働省認定) 女性の育児休業取得率や所定外労働の削減など数項目の基準を策定し、女性のみならず従業員が働きやすく、人材が定着する職場の実現に向けて取り組んでいる。現在約1,800社が認定を受けており、ゼネコンでは大成建設(株)や鹿島建設(株)、清水建設(株)などが取得。社内の制度や意識改革を進めている。



提供：(一社)群馬県建設業協会

### 5 女性パトロール

群馬県建設業協会では、会員企業の女性職員で構成された「環境すみずみパトロール隊」が建設現場を視察し、整理整頓、清掃状況や従業員の服装・態度などを女性の目線から点検する取組みを行っている。女性独自のきめ細かなチェックと改善点の指摘により、現場環境の質の向上や労災防止に貢献。検査後の現場には「検査済」シール(上記)が付与され、それを貼ることで地域へのアピールにつながる。現場環境の改善や建設業界のイメージアップにつながる取組みとして注目されている。



### 2 女子トイレ

建設現場の仮設トイレは男女の区別がなく、品質も必ずしも満足いくものではない。国交省は建設業界での更なる女性活躍の機運を受け、仮設トイレの仕様づくりを進めていく方針だ。質を高めることで、災害時対応や現場見学会の際でも安心して使用していただくことができる。今後、女性が働きやすい建設現場を整備していくためにも、仮設でありながら高機能で清潔な仕様のトイレを普及する必要がある。

### 4 表彰制度

女性が働きやすい環境は自ずと「快適職場」の整備につながる。従業員が働きやすい職場環境のため、独自のスローガンを策定し、人材育成や地域貢献に寄与している職場を表彰する、「日建連 快適職場表彰」。その制度の中でも、将来的には女性が多く活躍している職場や女性技能労働者への表彰制度を確立し、女性雇用拡大を促す取組みを進めていく方針だ。



# 女性が働きやすい設備・制度を見直す

## より働きやすい建設業界へ

建設業界への女性進出を受けて、働く環境の改善に向けた取組みが既に動き始めている。例えば、従来の建設現場ではトイレや更衣室などの設備は男性用に限られていたが、近年は女性用の設置が進んでいる。また、環境整備にとどまらず、時差出勤や終業時間の短縮など、制度の改良にも目が向けられるようになった。特に、女性の雇用を増加させる上で、出産や子育てに対するサポートは重要な責務である。このような「女性のため」の取組みが、いつの間にか「職場全体」の働きやすさにつながっている例も少なくない。ここでは、実際に行われている事例を紹介する。



各自がウエストサイズを調節できるような仕様に改良。当初の女性用はゴムだった。



現場で毎日使う手帳をスムーズに出し入れできるように角度を工夫。デザイン性と機能性を両立させた。

### 1 女性用ユニフォーム

清水建設(株)は、2009(平成21)年「ダイバーシティ推進室」を立ち上げ、従業員のよりよい職場環境の整備を進めている。その一環である「女性活躍推進」への取組みにおいて、建設現場の作業所ユニフォームや安全帯等、現場で使う備品を女性向けに一部改良した。ユニフォームは当初、男性用を単純に小さなサイズにただけだった。しかし、体のラインに合わず、動きにくいといった意見が続出。何度も試着会を行い、実際に現場で働く女性の意見を細部まで取り入れ、機能性を追求した。まだ100%ではないものの、納得できる形に仕上がったという。また、安全帯については長時間身に着ける負担を軽減するため、軽量化をはかり、ベルト部分にはクッション(サポーターベルト)を標準装備。カラーバリエーションにピンクもプラスした。すると、女性にはもちろん、男性にも好評を得た。今後も改良を重ね、建設現場で働く女性を積極的にサポートしていく。

裏地がしっかりとついているため耐久性がアップ!女性が気になる後姿も安心。



スチールからアルミへ素材を変更することで軽量化を実現。ベルト部分にクッションがついたものは腰への負担が大幅軽減。



ランヤード部分も伸縮性の素材に変更。軽量化とコンパクトさを実現。

しゃがんだ時に背中が出ないように、背面の裾を長く、サイドのカットも工夫した。



TECHNICAL  
EXPERT

アクティブに、ポジティブに。  
総合建設業の  
女性社員

「土木の仕事って格好いい」

「この道しか考えられなかった」

「仕事はなんでも楽しい」

「一番応援してくれたのは夫でした」

「土木はこんなに緻密」

「自分で図面を引いた線が実物になっていく」

「仕事は常にメリハリのある働き方を」

「社内外で頼りにされる研究者になりたい」

「技術者は、安全に関して重い責任がある」

ゼネコンでいきいき働く  
女性社員たち

日本の建設業界をリードする大手ゼネコンも女性社員が活躍できる職場環境、制度、体制の構築を目的とした様々な活動を展開している。ワークライフバランス（仕事と私生活の均衡）の確立、これを後押しする短時間勤務や、育児休業といった制度の充実と定着を目指す取り組みが続く。「朝夕で実現できる課題ではないが、少しずつ女性社員の数は増えている。彼女たちの本音を聞いてみた。決して平坦な日常ではない。ただ、その充実感も大きいと語る表情は、一様に明るく元気だ。「家族と楽しめる環境を」「訪れる人を笑顔にする建物を」。彼女たちの言葉とキャリアは、あとに続く女性たちの道標になる。

ゼネコンだからできる  
多くの経験で  
自分の強みを見つけない

学生時代、旅行中にヨルダンとイスラエルとの国境に架かる橋に日の丸がついていたのを見て、なんて格好いいんだろうと感動しました。この体験が、ゼネコンに就職したきっかけになりました。入社してからこれまで、主にトンネルの設計や施工を担当してきましたが、自分の設計を基に構造物がつくられていくと思うと、責任の重さを痛感しています。

ゼネコンの魅力は、皆で一つのものをつくり上げて行くこと。プロジェクトにかかわっている多くの方々を中心になってまとめていくことが、ゼネコンの技術者の役割だと思っています、そのことに大きなやりがいを感じています。

私は何でもやってみたいタイプなので、ゼネコンに入ったら絶対にこれがやりたいというものではなく、いろいろと経験してみようと思っていました。今は、大学院で現場における人材資源マネジメントの研究を行っています。前向きに何でもやりながら、自分の強みを見つけていきたいですね。



鹿島建設  
土木設計本部  
橋本麻未  
(現在は、大学院に出席中)

これからも新しいことに  
どんどんチャレンジ  
していきたい

大学で建築を学んでいくうちに、構造デザインに興味を持つようになりました。ゼネコンに入ったのは、自分で図面に引いた線が実物になっていくのを見たいと考えたからです。

構造の設計職として採用されたのですが、新人技術者に施工を経験させるという会社の教育方針により、1年目はマンションの建築現場に施工管理職として配属され、竣工までを経験することができました。竣工の日、それぞれの部屋に電気がともったのを見たときのことは、とても印象に残っています。

現場への配属が決まった時には私にできるかととても不安でした。でも、できないことってないんじゃないかなと、現場を一年経験した今は思っています。現在は本社の設計部に移動し、構造設計を担当しています。体力、精神力でも男の人にはかなわないと思うことはありますが、特に気負わず、新しいことにどんどん挑戦していきたいです。



鉄建建設  
建築本部設計部構造設計グループ  
和田郁子

手がけた構造物が  
多くの人に使われる。  
それが土木の大きな魅力

高校生のころ、家の近くで開始された大規模な再開発事業に伴うモノレール延伸工事を間近に見たとき、「土木の仕事って格好いい」と思ったことがきっかけで土木の道を目指すことにしました。大学に進学し土木を学んでいくうちに、実際に自分の手でモノづくりに取り組んでみたいという思いが強くなり、ゼネコンに就職しました。

初めて工事現場に出たとき、構造物が大勢の人の力で作られていることを知り感動する一方、その人たちを一つにまとめて厳格に施工管理する現場管理者の役割の大きさを痛感させられました。施工管理に対する不安に押しつぶされそうになることもありましたが、所長をはじめとする先輩職員から、「困ったことがあれば、いつでも連絡してこい」と言っていたことが心強い支えとなりました。

今は現場で数多くの経験を積んでおきたいと思っています。まだ模索中ですが、技術者として自分はどうあるべきかの答えを考えていきたいと思っています。



奥村組  
東日本支社土木第一課武蔵水路工事所  
松本恵美

調査や実験・解析を行った  
研究結果がプロジェクトに  
反映される喜び

入社以来、技術センターに勤務し、ビルやトンネルで火災が起きた際、安全に避難するための技術開発をしています。これまでに一番感動したのは、それまで火災時の避難安全評価で考慮されていなかった対策の効果について、実際に調査・実験や解析も行い、その結果がプロジェクトの設計に反映されたことです。

年に数回行う、国内外の学会などでの研究成果発表も、やりがいを感じる時です。研究職は、大学の先生や同業他社の方々と学会の委員会などで一緒に働く機会が多く、垣根を越えて研究の悩みについて相談に乗ってもらうこともありますし、刺激を受けることが多くあります。

今後も、今まで通りこつこつと一つひとつの業務を確実にやり遂げ、社内外で頼りにされる研究者になりたいです。そして、今後本格的な高齢社会を迎えるにあたって、高齢者が困らないような環境づくりに生かせる技術開発ができたらと思っています。



大成建設  
技術センター建築技術研究所  
防災研究室副主任研究員  
池田由華

子どもと一緒に親しめる  
水辺をどんどん  
つくっていきたい

学生時代には海洋生物の研究をしており、いずれ海に関わる仕事をしたいと考えていました。そして、海洋環境に与えるインパクトが大きい場所で環境との共存について、実際に施工する現場で考え、実行したいと思って、建設業界を選びました。

入社して、海に関わるプロジェクトで海岸や地盤工学を専門とする人と、生物が専門の私が同じチームで、それぞれの視点を合わせて沿岸域の環境創造に関する業務に携わり、一つのものをつくり上げていく面白さを実感しました。ゼネコンがものをつくるだけでなく、環境のこともさまざまなことを検討しているというのは、一般の方々にはなかなかわからないことではないでしょうか。それが、ゼネコンの特徴である多様性といえるのかもしれません。

最近は、都市部の限られた環境の自然再生にも興味があります。老朽化した護岸の再生などをする際に、人が海と身近に接することのできる空間をもっと増やしていけたらいいですね。



五洋建設  
土木本部環境事業部主任  
竹山佳奈

自分の知識で  
話せるような一人前の  
技術者になりたい

建築の世界を志したのは、建築リフォーム会社を経営する母の影響が大きく、むしろ、この道しか考えられなかったというのが本音です。就職先を決める時には、いろんな人が笑顔になる建物をつくりたいと考え、ゼネコンを選びました。現在は、現場で施工管理の仕事をしています。

建築は格好いいと思ってゼネコンに入りましたが、実際には良いことばかりではなく、体力的、精神的に大変なこともたくさんあります。上司や先輩からしかられることもあります。私を一人前の現場監督だと思ってくれる人は、それだけ指導も厳しくなりますが、これは当たり前のことだと思っています。

今の目標は、一人前の技術者になることです。建築は奥が深く、現場にでて1年半程度でわかる世界ではありません。たとえば、現場には開けなければいけない1ミリと開けてはいけない1ミリがあります。そういったことを理解し、自分の知識で話せるような技術者に早くになりたいです。



西松建設  
関東建築支社北品川再開発出張所  
中村茉莉



現場での肩書きは「副所長」。その頭に「女性」がつくことはない。現場全体を見渡し、綿密なコミュニケーションをとりながら、的確な指示を出していく。



“ 教科書にはない、施工の実際を知りたいと思った ”

**ものづくりで人を感動させたい**

大成建設(株)が手がける秋葉原のオフィスビル新築現場で副所長を務める廣作利香が、建設の世界に目覚めたのは高校生の頃だった。美術館として一般公開されている元皇族朝香宮の邸宅、東京都庭園美術館を訪れたときのことだ。一九二〇年代からヨーロッパで流行したアール・デコ様式の建物の美しさが、胸に迫ってきたという。「建物ばかりではなく、玄関扉に施されたルネ・ラリックのガラスレリーフなどを目にして、装飾や造形がこれほど人を感動させるものかと驚きました」。それに触れる人に感動を与えるものを自分の手づくりしたい。大学は迷わず建築学科に進んだ。

しかし、構造設計を学びながら、いつしか物足りなさを感じるようになったと話す。「設計はデスクの上でできますよね。絵を描いたり、模型をつくったり。ある程度までは自分一人で行けるんです。でも、『施工』はちがう。実際の現

場で手を動かしてモノをつくりたいという想いが強くなってきました」。大学の研究室の研修で、大成建設が施工する浦安市の総合体育館の現場に足を踏み入れた。初めての「現場」だった。「緊張感はなかったですね。楽しさが先に立って。クレーンを組み立てる工程を目の当たりにして、現場のクレーンってこうやってつくるのか、とか。現場だからこそ学べるのがたくさんありました」と振り返る。

**現場全体の気持ちに耳を澄ませる**

大学を卒業後、そのまま大成建設に入社。二〇年ほど前のことだ。「現場に女性職員」という風景がまだまだ珍しい時代だった。「実際『女が来るとこるじゃない』と言われたこともありました。仕事は先輩、親方の背中を見て学べ、といった風潮も残っていた。でも当時から私自身『女性だから』といった意識は全くありませんでしたけど」。やはり、現場の面白さが廣作を魅了した。施工写真の撮り方もわからない。図面を読み違え

SITE  
MANAGER

「現場」の気持ちに耳を傾ける  
女性副所長



大成建設株式会社 作業所副所長  
廣作利香



現場には女性専用の水洗トイレ、更衣室も完備している。場内の通路には植栽を施した。こうした試みも女性が働きやすい職場づくりに一役買っている。

て一度施工したボードをはがしたこともあった。その度に上司から怒鳴られる。しかし、そうした経験を積むことで自らが成長していく、その過程を楽しみだけの気概があったのかもしれない。以来、現場一筋、これまでに大小二〇近いプロジェクトに携わってきた。廣作は、この秋葉原の現場で、初めて副所長に任命され、大きな転機を迎えた。現場を「管理」することの重要性を再認識している

の難しさがありません。予算や業務に関わる効率も大きな課題になる。これからは「利益の確保」といった企業人としての視点も求められるようになるだろう。管理の幅が広がり、今まで以上に「人の気持ち」に気を配るようになった。上司の指示はその背景にある真意を汲み取るよう努めている。職人に指示を出すときも、彼らの意見に耳を傾け、気持ちに配慮して言葉を選ぶ。「話しただけでは共通の理解が得られないときは、絵を描きながら一緒に考えます。もちろん一人ひとりの体調にも目を向ける。管理者の仕事は物心両面から現場を細やかに見る



10代のころ、初めて建築の美しさに魅せられた。そのときから、ひたすら建設の世界を走り続けてきた。今も「人の心に残るモノをつくりたい」その一念で現場に立っている。

現場での撮影の合間でも職人さんたちに声をかける。冗談を飛ばしカラカラと笑いながらも、現場全体の様子を把握し、進捗を見極める真摯な目線が印象的だった。**女性も「地図に残る仕事。」を**

くことも必要なんです。女性の参入もさらに進んでいいはずだという。業界意識、職場環境も大きく変わった。二〇年前の現場を思い返すと隔世の感がある。「当社のキャッチフレーズではありませんが、私たちの仕事は将来にわたって地図に残る。それは施主、施工者、技術者、そして近隣の市民のコミュニケーションの上に成り立っている素晴らしい仕事なんです」。人間が好きならばこの仕事は続けられる。人に感動を与えるものを創ることができる。廣作はそう確信している。

# 広げる 活躍できる場 働く場



「戦後強くなったのは女性と靴下（ストッキング）である」。半世紀ほど前に流行語としてもてはやされた言葉だ。古典とも言えるこの台詞の背景には、どこか女性を見くびる視線がなかったろうか。ところが今回、建設の現場で活躍する女性たちの声に耳を傾けながら、「女性ならではの」といった特集の主旨を見失いそうになるほど、女性は真の意味で強くあり続けている。もちろん現場には女性の感性を最大限に活かす局面が数多く存在する。しかし、それ以前に彼女たちの仕事に対する姿勢は凛としていて、そこにあるのは「建設を担う者として」という強靱な意志だけだ。もはや「建設現場は男社会」といった常識は通用しなくなっているようにも感じた。業界の扉は女性に対してもすでに大きく開かれている。

一方、就労者の女性比率はまだまだ小さい。現場で女性のプロフェッショナルを見かけることが多くなってきたとはいえ、絶対数が少ないのが実情だ。

いま、日本は力を求めている。そのために国家的な施策、業界のアクションプランを力強く、そして具体的に推進する。その実行力が問われる時代の幕が開いた。